

カナダのブリティッシュコロンビア州における 就学準備について

—Ready, Set, Learnに見られる保護者の役割—

松井 剛太
(幼児教育)

760-8522 高松市幸町1-1

Transition from preschool to kindergarten at province of British Columbia in Canada: Focus on roll of parents

Gota Matsui

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

要旨 本研究の目的は、カナダのブリティッシュコロンビア州における就学準備において、保護者に求められている役割を明らかにすることである。Ready, Set, Learnの冊子には、おしゃべり、本、数、情緒、なかよし、遊び、テレビと電子メディア、視力・聴力、健康な歯、身体活動、健康的なおやつなどの項目があった。リテラシー習得の保護者の役割が大きく、移民・難民の受け入れが多いカナダの文化的背景が影響していると考えられた。

キーワード カナダ ブリティッシュコロンビア州 就学準備 保護者

I. はじめに

1990年代後半より、脳科学、神経科学、経済学などを含む学際的な研究成果によって、乳幼児期の保育・幼児教育の重要性が指摘されている。具体的には、乳幼児期への投資によって、①高い収益が得られる、②貧困削減と基礎教育の普遍化という開発問題の達成において有効な手立てとなりうる、③初等中等教育における留年や中途退学を減少させる、④子どもの身体的・知的・情緒的な発達を促進させる、⑤家庭や地域の連携を強化する、⑥母親の就労を促進する、⑦経済成長を促進するなどといった効果が実証されている(浜野・三輪, 2012)。

このような背景から、UNESCOやOECDな

どの国際機関が、乳幼児期の保育を最優先課題の一つに取り上げている。OECDは、誕生から就学前までの乳幼児に対する適切なケアと教育が、その後の人生の確固たる基盤になることを強調した。さらに、就学前教育と学校教育との連携を求め、子どもにとってのスムーズな移行を实践するよう提言した(OECD, 2001; OECD, 2006)。それに伴い、各国で政府による公的支出を前提とした教育改革が積極的に行われる動向にある(White, 2012)。

本稿で対象とするカナダは、様々な国際機関の調査において、保育・幼児教育に対する政策が他の先進諸国に比べて後れていることで知られている。OECDの調査(2006)では、0歳から6歳の保育・幼児教育に対する公的支出

のGDP比が、対象となった14か国中最も低い割合であった。また、UNICEFの調査においても、幼児教育・保育における子どもの権利保障の最低基準を全10項目中1項目しか満たしておらず、対象となった25か国中最下位であった(Adamson, 2008)。

しかし、この結果はカナダの国情によるところが大きいと考えられている。カナダはロシアに次いで2番目に大きい国土を持ち、10の州(ブリティッシュコロンビア、アルバータ、サスカチュワン、マニトバ、オンタリオ、ケベック、ニューブランズウィック、ノバスコシア、ニューファンドランド・ラブラドル、プリンスエドワードアイランド)と3つの準州(ユーコン、ノースウェスト、ヌナブト)を持つ連邦国家である。そして、自由主義的な国家体制を敷き、各州に首相、内閣、議会があり、大幅な自治権が認められているため、連邦政府による政策企図が各州に行き渡りにくいことが指摘されている(Mahon, 2009)。

また、カナダは移民や難民の受け入れに積極的であり、年間20万から25万人程度の移民を受け入れ(井出, 2014)、多文化主義に基づいた政策が行われている。1971年、連邦政府の首相であったピエール・トルドーにより多文化主義の声明が出された(Government of Canada, 1971)。これは、先住民(Aboriginal)の権利を尊重すること、またイギリスとフランスの植民地であった影響により、英語とフランス語および両国の文化を尊重することを提起するものであった。こういった背景の中、カナダは多民族の「同化」を否定し、それぞれの民族における文化を尊重しつつ、国を発展させる方針を理念としている。そのため、保育・幼児教育においても、地域や子ども一人ひとりの文化的多様性を含めた実践が志向されている。以上の国情を事由として、カナダでは各州で特色の異なる政策や実践が行われている。

ブリティッシュコロンビア州(以下、BC州)では、とりわけ幼児の就学準備に関して意識が高い。その契機は、ブリティッシュコロンビア大学のHuman Early Learning Partnership

の教授であったHertzmanによって行われたThe ECD Mapping Projectの研究結果にあった(Hertzmanら, 2002)。これは、BC州において地域別に子どもの発達状態を明らかにする調査であり、2002年にまとめられた報告書では、発達指標に応じて、地域ごとに結果が色分けされて示された。その結果、多くの地域において25%、一部では40%以上の子どもが、幼稚園において発達の課題を抱えていることが明らかにされた。このデータは、カナダで初めて地域の特徴と子どもの発達に関連性があることを示したものとされ、地域を基盤として幼児の就学準備を進める根拠となっている。

そこで本研究では、カナダのBC州において、就学準備で行われている取り組みについて報告する。特に、保護者に求められている役割について、州政府から提示されている文書をもとに検討することを目的とする。

II. BC州の保育・幼児教育の概要

1. BC州の保育・幼児教育施設について

BC州の保育・幼児教育施設は、3つの省の管轄下に置かれている(Friendlyら, 2015)。保育施設は子ども家庭省(Ministry Children and Family Development)と保健省(Ministry of Health)、幼稚園は教育省である。保育施設は、子どもの年齢などに応じて様々に分かれており、保護者はサービスの種類や子どもの年齢、またサービスを受ける地域に応じた保育料を支払っている。幼稚園は子どもが5歳になる年の1年間のみであり、義務教育ではないが、ほぼすべての子どもが幼稚園に通った後、小学校に入学する。なお、2009年から2年をかけて幼稚園はすべて全日制に移行し、公立小学校の中に設置されている。主な保育・幼児教育サービスの概要は表1のとおりである。

2. BC州の保育者の資格について

保育・幼児教育における教員の資格は、大別して3種類ある。第1に、幼児教育士(Early Childhood Educator)、第2に、乳幼児教育士

表1 BC州の主な保育・幼児教育サービス

種類	名称	保育時間 クラスの人数
認可保育 サービス (施設)	Group child care (生後36ヶ月以下)	13時間以内 12名
	Group child care (生後30ヶ月から 幼稚園就学まで)	13時間以内 25名
	Preschool (生後30ヶ月から 幼稚園就学まで)	4時間以内 20名
幼児教育	幼稚園(幼稚園)	9時から15時 19名

(Infant and Toddler Educator), 第3に, 特別支援教育士(Special Needs Educator)である。ただし, 幼稚園の教師は, これらのいずれの資格も必要とされておらず, 小学校以降に適用できる教員資格証明書を有していることで教育を行うことができる。つまり, 保育サービスと幼稚園の間で資格や専門性が異なっているといえよう。

3. カリキュラムについて

カリキュラムは, BC州のEarly Learning Frameworkを参考にして, 各施設において作成される(BC Ministry of Child and Family Development/Ministry of Education, 2008)。Early Learning Frameworkは2007年にイタリアのレージョエミリアの取り組みやアイルランド, スウェーデン, ニュージーランドのナショナルカリキュラムを参考に作成された。特徴としては, 多文化共生の国家理念を反映して個々の子どもと家庭の多様性(文化, 信念, 知識, 生育歴, 将来の志向)と地域社会での生活に配慮していること, そして, 遊びをベースにした学びが強く打ち出されていることである。

このFrameworkの理念は幼稚園から小学校低学年までを想定されたものであるが, 幼稚園における実質的なカリキュラムは, 保育とは異なり, 幼稚園から小学校・中学校まで一貫した形で示されている。したがって, BC州では就学準備や接続といった概念は, 保育サービスか

ら幼稚園への移行を指す。2015年には, 幼稚園以降のカリキュラムは大幅に改訂されて, それまでのスキルベースからコンピテンシーベースへと様変わりし, 生涯学習の観点からより連続的な学びが意識されるようになった。2016年現在は, カリキュラムの移行期であり, 幼稚園での教育が変わろうとしているところである。

4. 保護者を中心とした就学準備の取り組み

幼稚園への接続においては, 移民などによる多様な家庭背景から, 一律に取り組みを実施しても理解が促されにくいという現状にある。そのため, 各家庭での準備を促すという側面が強く, 保護者に対して啓発をする取り組みを中心に行っていることが特徴である。一般的に行われているのは, Ready, Set, Learnという冊子をもとにした取り組みである。

Ⅲ. Ready, Set, Learn Bookletの概要

1. Ready, Set, Learn Bookletとは

Ready, Set, Learn Bookletは, 幼稚園への就学準備に関する保護者への啓発冊子である(図1: <http://www2.gov.bc.ca/gov/content/education-training/early-learning/support/ready-set-learn>)。これは, 様々な国を背景にもつ保護者に向けたものであり, 13か国語のバージョンがある(アラビア語, 中国語, 英語, フランス語, ヒンディー語, 日本語, 韓国語, ペルシア語, パンジャブ語, ロシア語, スペイン語, タガログ語, ベトナム語)。日本語では, 「位置について, よーい学習」と翻訳されている。

この冊子はインターネット上で公開されている。全26ページで構成されており, 就学に向けて家庭でやってもらいたいことの11項目として, おしゃべり, 本, 数, 情緒, なかよし, 遊び, テレビと電子メディア, 視力・聴力, 健康な歯, 身体活動, 健康なおやつについて具体的に記されている。またこれに合わせて, 就学の7~9か月ごろまえに各地域の小学校でReady, Set, Learnのイベントが行われ, 幼稚園



図1 Ready, Set, Learnの冊子

での教育内容や家庭でやってもらいたいことについて、実際に家族も交えながら催し物のような形で情報提供と啓発が行われている。

2. Ready, Set, Learnの内容

この冊子では、最初に子どもの家族に対する紹介文がある。そこでは、「子どもは遊びを通じて学び、就学に備えます」という文言があり、遊びを基盤とした発達を強調している。この理念は、先述したEarly Learning Frameworkと通じていると考えられる。また、就学につながることで、①自信、②友人関係、③言語の発達、④大人や他の子どもたちへ、必要なこと、欲求、考えを伝える能力、⑤指示や日課に従う能力、⑥創造力、意欲、協調性、粘り強さを養う環境、とあり、次の11項目における学習を通して、それらを身に付けることがねらいとされている。

(1) おしゃべり

言葉の発達を就学への大切な基盤として位置付けている。そのための最上の方法として、子どもとの会話を挙げている。

具体的には、その日に何をしたか、明日は何をするつもりかを子どもと話すこと、車中から見えるものなどの名前を教えること、子どもの

話に耳を傾け質問をすること、言葉遊びをすること、歌を歌うこと、早口言葉に挑戦すること、子どもの言葉に補足を加えること、子どもが絵を描いたら、その絵に関する話を聞くこと、色を示す言葉が入った文を使って話をする事、同じ音で始まる言葉さがしをすること、が示されている。

(2) 本

言葉、発音、文字などに関する幼児の知識と就学への準備には強いつながりがあるとしている。そのため、子どもと一緒に読書を楽しむことを推奨している。

具体的には、子どもに本を読んであげる時間を毎日決め、静かな場所で読み聞かせること、本を読むときに絵に関連する質問をすること、本を読むときには子どもが安心するよう、膝の上に座らせたり、子どもの隣に座ったりすること、子どもに本を選ばせること、子どものそばで自分の本を読むこと、同じ本を何回も読むこと、図書館に定期的に通い、子どもが選んだ本を借りること、子どもの友達と5冊の本を持ち寄り、本の貸し借りパーティーを計画すること、本の内容を日常生活に織り込むこと、が提案されている。

(3) 数

簡単な数、時刻、距離、形などの概念を理解することは、学校へ上がった必要となる算数能力の育成に役立つとしている。しかし、フラッシュカードを見て学ぶよりも、実生活と関連を持って学ぶほうが効果的であるとしている。

具体的には、子どもにさせるお手伝いに数を数える行動を含めること(例、スプーンを6本出して)、時間の順を追って出来事を話すこと(例、10時に買い物に行くから、その後お昼を食べて遊ぶね)、子どもと一緒にカレンダーを作り、特別な日が来るまで毎日印をつけさせること、家の電話番号や住所を覚えさせること、ボタン・石・ブロックなどの物を集めて、形、色、大きさで分類すること、身の回りにあ

る物の形について話をする事、子どもの体重や身長について話す事、ジュースのビンなどを用意し、コップに何杯水を入れたらいっぱいになるか推測させる事、子どもに何かをさせるときに方向を示す言葉を使う事（例、箱の下を見てごらん）、小さなもの（ボタンなど）を紙に貼り付け、その紙を綴じて数の本を作る事、を提示している。

（４）情緒

適切に感情を処理することを学び、思いやり、自尊心、立ち直り、自己主張などを育むことで、学校生活における様々な課題に対応するのに役立つとしている。

具体的に保護者ができることとしては、なぜそういうふうを感じるのか子どもの気持ちについて会話すること、子どもの感情を表現するために、保護者が新しい言葉を使って代弁することで語彙を増やすこと、子どもが怖がることに耳を傾けて恐怖心を受け入れ、子どもを抱きしめて安心させること、子どもが自身の感情に関する話をできるように促すこと（例、何をするとうれしいの？）、本を読んでいるときに主人公の気持ちを聞いてみる事、悲しみ・怒りなどの感情の処理の仕方を示す事、不適切な態度にはすぐに穏やかに対処すること、忍耐と粘り強さを保護者が手本として示す事、が挙げられている。

（５）なかよし

基本的な規則を常に守ることを通して、他者と友好的に接することが、就学準備を整える上で重要な要素としている。

保護者が子どもと一緒にやってみる事として、日常生活の中で順番を待つように肯定的な言葉や笑顔で伝える事、順番のルールが含まれるカードゲームなどをすること、子どもに簡単な指示を与え、それをやり終えたら誉める事、行儀よく振る舞ったときは、喜びと励ましの言葉をかける事、相手を敬う態度の手本を示す事、子どもが日課として行う決まりを定める事、他の人のやり方を見てみる事、友

達と交流する機会を多く設ける事、遊ぶ時間は1～2時間と短くし、少人数で遊ばせる事、なるべくそばにいて、子どもたちだけで勝手に遊ばせない事、子どもを同年齢の友達の家を連れて行き、他の家庭のルールを学ぶ機会を設ける事、友達を招き、迎え入れるときの態度を手本として見せる事、を提示している。

（６）遊び

子どもは、遊びを通じて世の中のことや、その中で自分の役割を模索し発見するとし、様々な遊びをさせ、あらゆる状況に直面させることにより、頭脳は成長に必要な刺激を受けられると記されている。

保護者がやる事として、時間を作って子どもと一緒に笑い遊ぶ事、活動を決めた遊びと自由な遊びのバランスをとること、本や廃材を保管しておいて子どもが遊びに使えるようにすること、古い衣服などごっこ遊びに使えるようなものを保管しておく事、子どもと一緒にごっこ遊びをすること、遊びの種類を子どもが選べるような機会を設ける事、粘土や水など汚れても構わない遊びの機会を設け、子どもが作ったものはよく見えるところに飾ること、屋外で遊ばせる事、ボールやお手玉などを投げ合う遊びをすること、子どもが興味を示せば家事の手伝いをさせる事、が示されている。

（７）テレビと電子メディア

テレビ、コンピューター、ビデオゲームは、子どもの発達に与える影響は十分解明されていないとしながらも、子どもが成長するにつれ日常生活の中でさらに重要なものになることを述べている。

保護者ができる事としては、制限を設けて守らせる事（例、電子メディアに触れる時間は合わせて1時間が妥当である）、保護者自身が読書、音楽鑑賞など電子メディアに触れない時間を子どもに示す事、子どもがテレビを見ていたら座って一緒に見て会話をする事、寝る前には電子メディアをやめる事、年齢相応

の教育価値のある内容にすること、電子メディアは家族の集まる部屋に置くこと、暴力や恐怖の内容については、否定するような話をする、子ども番組を録画しておくこと、食事中はテレビを消して会話を優先すること、コンピューターの使用時間に制限を設けること、が提案されている。

(8) 視力・聴力

子どもは見たり聞いたりして身の回りのことを学ぶため、視力と聴力は、学校に行くようになると学習に不可欠な要素になるとしている。目と耳の問題に関する兆候が示されており、心配な場合は医者に相談するよう促されている。

子どもと一緒にやってみることにしては、目と手の協調動作を発達させるために、キャッチボールや積み木などをすること、目を守ることの大切さを教えること、紫外線を100%カットするサングラスを着用させること、先のとがったおもちゃなどの正しい使い方を教えること、話、歌、本読みなど様々な音声を使って楽しむこと、手をよく洗い、耳の感染を防止すること、大きな音を避けること、が挙げられている。

(9) 健康な歯

歯は子どもの身体全体の健康に重要としており、正しい発音、食生活、健康的な笑顔にとって必要と述べている。

保護者の役割としては、フッ素が含まれる歯磨き粉グリーンピース一粒ぐらいの量を歯ブラシにつけること、歯磨き粉を適量つける練習を子どもと一緒にすること、歯磨きゲームを考えたり、歯磨きの歌を作ったりすること、歯にやさしいお菓子を選ぶこと、歯医者さんへ行くことに良い印象を持てるように努めること、が示されている。

(10) 身体活動

身体活動は丈夫な骨格を作り、筋肉と心臓を強化し、身体の柔軟性、良い姿勢、バランスなどの発達に役立つとされ、いろいろな活動を幼

少の頃から行うことで、学校でより安全に身体活動をすることができるとしている。

具体的には、鬼ごっこ、かくれんぼ、ボールを投げる・ける・打つ、またスイミングなど身体を動かせる遊びやゲームを子どもと一緒にすること、公園や遊び場へ子どもと歩いて行くようにすること、屋内でも踊ったり、走ったり、跳んだりするなど身体を動かすこと、近所と一緒に散歩すること、買った食料品を運んだり、簡単な家事や庭仕事などを手伝わせたりすること、が提案されている。

(11) 健康的なおやつ

子どもは学習、遊び、成長に役立つ食物の摂取を毎日必要とするため、保護者は、一日三食と健康的な間食を用意するように促している。

保護者のできることとしては、健康的なおやつは子どもが空腹にならないうちに与えること、子どもと一緒に食事の支度をして、食べたことのない果物や野菜を食べさせてみる、健康的なおやつの中から、子どもにおやつを選ばせること、一日中絶え間なく物を食べたり、飲んだりさせないこと、食事やおやつのときに牛乳か水を飲ませること、が示されている。

IV. おわりに

カナダのBC州における就学準備として、Ready, Set, Learnの内容を概観した。文書の内容としては、読み書き計算に関すること（おしゃべり、本、数）、社会情動的スキルに関すること（情緒、なかよし）、健康に関すること（健康な歯、健康的なおやつ）、身体的な発達に関すること（視力・聴力、身体活動）、そして遊びに関すること（遊び、テレビと電子メディア）と大きく分けられるだろう。とりわけ、移民・難民の多い国情から、英語に関する読み書き計算の能力は、就学後の学習に大きな影響を及ぼしてしまう。そのため、これらは就学準備として最も重要な項目として位置付けられている。幼稚園入学後においても、家庭での読み書き計算に関して啓発する文

書 (reading for families, writing for families, math for families) が出されており, 具体例を提示し, 保護者が家庭でできることを提示している (<http://www2.gov.bc.ca/gov/content/education-training/k-12/teach/teaching-at-home>)。しかしながら, 保護者に求めていることは, 子どもに特別な勉強をさせるのではなく, 日常生活の中で子どもと普通にかかわりを持つことだけである。

日本においては, 就学前施設においてアプローチカリキュラムなどの就学準備の取り組みがなされ, 小学校においてもスタートカリキュラムでスムーズな受け入れを目指しているように, 教師によって就学準備を促す取り組みが行われているといえる。一方, 保護者に対する啓発は行っている, プログラムとして確立するには至っていないのが現状であろう。

保護者が家庭で担う役割は, 国の価値観や文化的背景によって異なる。日本での就学準備は, 小学校のルールへの適応を強調する傾向にある。しかし, BC州では, そういった一時的な行動に目を向けるだけではなく, 就学準備という時期を家庭の役割を考え直す機会として捉えているようであった。

幼児期から学童期への移行は, 国際的にも大きなトピックであり, 日本でも研究が進められている。その際, 家庭の役割をどう包括して議論を進めていくのか考慮しておく必要があるだろう。

引用文献

1. Adamson, P. (2008) The child care transition: A league table of early childhood education and care in economically advanced countries. UNICEF Innocenti Research Centre Report Card 8, 2.
2. BC Ministry of Child and Family Development /Ministry of Education. (2008) British Columbia Early Learning Framework. http://www.llbc.leg.bc.ca/public/pubdocs/bcdocs/441125/early_learning_framework.pdf. (情報取得: 2016年11月)
3. Friendly, M., Grady, B., Macdonald, L. & Forer, B. (2015) Early Childhood Education and Care in Canada 2014. Childcare Resource and Research Unit, 125 – 128.
4. Government of Canada (1971). Canadian Multiculturalism: An Inclusive Citizenship. <http://www.cic.gc.ca/english/multiculturalism/citizenship.asp> (2016年11月確認)
5. 浜野隆・三輪千明 (2012) 発展途上国の保育と国際協力. 東信堂.
6. Hertzman, C., McLean, A. C., Kohen, E.D., Dunn, J. & Evans, T. (2002) Early Development in Vancouver: Report of the Community Asset Mapping Project (CAMP). Human Early Learning Partnership.
7. 井出和貴子 (2014) 移民レポート5 カナダ: 移民受け入れ先進国が直面する問題. 大和総研. http://www.dir.co.jp/research/report/overseas/world/20141119_009154.pdf (2016年11月確認)
8. Mahon, M. (2009) Canada's Early Childhood Education and Care Policy: Still a Laggard? International Journal of Child Care and Education Policy, 3 (1), 27 – 42.
9. OECD (2001) Starting Strong. Early Childhood Education and Care. Paris. OECD publishing.
10. OECD (2006) Starting Strong II: Early Childhood Education and Care. Paris. OECD publishing, 105.
11. White, L.A. (2012) Must we all be paradigmatic? : Social investment policies and liberal welfare states. Canadian Journal of Political Science 45 (3), 657 – 683.

付記

本研究は, 香川大学在外研究制度, 及び平成28~30年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (B) (課題番号16H05722 代表 七木田敦) の補助を受けて実施されたものである。

謝辞

本研究の実施にあたり, プリティッシュコロ

ンビア大学のIris Burger先生、ブリティッシュ
コロンビア州リッチモンドのEarly Learning
Teacher ConsultantであるMarie Thom氏に多
大な協力を賜りました。ここに記して深謝いた
します。